

一仏両祖の教えを今に伝える

# 曹洞禅グラフ

SŌTŌZEN GRAPHICS

2016 夏号 No.137

お盆とは  
三世にわたる  
み魂まつり

— 山岸弘文

孟蘭盆会という

宗教研行持、仏教文化、

地域風習の一切を

行持として

相承していくところに

供養の本源が現成する



# すべての生きものを 供養する

## 正木 晃

まさき・あきら  
宗教学者。1953年神奈川県生まれ。国際日本文化研究センター助教授を経て、慶應義塾大学、立正大学講師。『千と千尋』のスピリチュアルな世界』など多数の著書がある。

仏教にとって、供養はとても大切な行為です。人間が人間らしく生きるために、決して欠かせない行為といっても過言ではありません。ところが、近年、供養がおろそかになってきているようです。そこでもう一度、供養について、ちゃんと考えてみたいと思います。

供養というと、通常は亡くなられた人の供養を指しています。ところが、日本では、人間以外の動物たちも、供養の対象です。そこで今回はまず、動物の供養について、考えてみます。いささか遠回りをするようですが、

動物の供養を考えることで、日本仏教の特質、ひいては曹洞宗のめざしてきたものの一端がうかがえるからです。

供養の対象は、あらためていうまでもなく、亡くなられた方の霊魂で



挿絵 / 長谷川葉月

ちを供養するという姿勢はいたって乏しいのです。日本仏教だけが、牛馬のような使役動物はもとより、自然界の魚や虫のたぐいまで丁寧ていねいに供養してきた歴史をもっているのです。

その典型例が、曹洞宗の瑩山紹瑾けいざんしやうきん禅師が修行僧の規則として定めた『瑩山和尚清規しんぎ』に見られます。十二月十日ならびに晦日の項に、こういう趣旨のことが書かれています。

「仏のたいなる慈悲は、平等にありとあらゆる生きものたちを濟度し、仏のひろやかな教化の力は、みな等しく多種多様な生きものを救うと言います。そこで、歳末、特に数日をかけて、お寺中の僧侶を総動員し、ひたすらお経を読んで、お寺の領地を耕すときに、犠牲になってしまった生きものたち（蟻・オケラ・カタツムリなど）、あるいはお寺を支援してくださる方々の領地で使役されている牛・馬・羊・豚・犬・鶏、および山林に暮らしている動物や虫のいっさいがっさい、水中であろうと陸上であろうとそこに住んでいるありと

す。人が死んで、肉体が減り去ると同時に、その人の全存在が消えて無くなってしまおうというのであれば、供養は成り立ちません。この理屈からすると、動物の供養は、動物にも霊魂が宿っていると考えられてきたことを意味しています。

じつは、動物を供養するという態度は、日本以外ではなかなか見当たりません。たとえば、医学の進歩に欠かせない実験動物を供養してきたのは、日本だけのようです。なぜなら、キリスト教をはじめ、一神教の国々では、

原則として、霊魂は人間にしか宿っていないと考えるので、動物の供養など、はなから問題外です。

さらに意外かも知れませんが、仏教でも、日本仏教をのぞくと、人間以外の生きものた

あらゆる生きもののうち、死んでしまったものに回向くわうしなさい。これらの生きものたちを救えるのは、仏の慈悲とお経の力しかありません」。

牛馬など家畜の供養は真言宗や日蓮宗などでも見られます。しかし、田畑を耕すときに

犠牲になった生きものたち、あるいは自然界の魚や虫のたぐいまで供養しなさいと、「清規」として正式に定められている事例はまずありません。

なぜ、供養するのか、その理由も書かれています。「今、聖者とあがめられている者たちも、過去世では蝙蝠こうちゆうでした。過去世で魚だったものが、今は阿羅漢あらかんになっている」からだそうです。つまり、この世のすべての生きものの中に仏性、すなわち仏と成る可能性が秘められていると瑩山紹瑾禅師は説いているのです。この教えは、自然との共生が必須の課題となっている二十一世紀の宗教にふさわしい思想として、高く評価されて良いはず



やまぎし・こうぶん

昭和15年1月1日、群馬県泰寧寺にて生れる。駒澤大学仏教学部禅学科卒。昭和37年大本山總持寺本山僧堂に安居。平成19年11月～24年1月大本山總持寺副監院。現在泰寧寺住職。

盂蘭盆会という

宗教行持、仏教文化、

地域風習の一切を

行持として相承していくところに

供養の本源が現成する

お盆とは

二世にわたる

み魂まつり

山岸弘文

正月は新しい魂の祭、  
お盆は仏の命の祭

お盆とはいかなるものかというお話ですが、これは魂の祭、命の祭、み魂まつりだと、ざっと言えばそういうことだと思っっています。よく年中行事として、「盆と正月」

しい魂を吹き込んでくださる。そういうエネルギーの塊といたらいいでしょいか、新しい魂をいただく、それが正月なのです。これも皆さんご承知だと思いますけれど、新しい魂を「あらたま」といい、和歌などで新年の枕詞になっています。「あらたまの年の初めの」なんていう歌がよく詠まれているでしょう。子どもたちには、今のよ

という対の言葉でいわれますね。その正月について、先にちよっと考えてみましょう。お正月には、ご承知のように子どもたちはお年玉を頂戴します。あの「玉」というものに、どういう意味があるかというところ、大晦日の晩にご先祖が、あるいは神様が、新しい年を迎えるに当たって次の一年も丈夫で元氣よく健康でやっていけるよう、新

うな難しいことをいっても分からないから、「はい、おとしまだよ」と、ふつう「お年玉」と書いて渡す。そして、私たちはその年の新しい魂をいただくことで一つ歳をとる、お正月が来ればみんな一つ大きくなっただけです。

今は満年齢で数えますが、そうなる前の日本人の年齢の数え方は、誰もかれもお正



群馬県旧三国街道須川宿の門火

月を迎えること、新しい魂を迎えることによつて一つ歳をとった。ということであらたまを迎えるのがお正月、それに対してお盆は亡くなった方の魂の祭といつてよいでしょう。はじめに申しましたように、み魂まつりということになります。これは「仏の命の祭」と言い換えることができると思います。

仏の命ということについて考えてみますと、ふつうは仏さんというと、今まで生きていた方が亡くなって仏さんになる。仏さんとは死んだ人だ、こう解釈している人がほとんどでしょうね。でも、仏さんはやっぱり生きています。仏は仏の世界に行つて、仏として生きています。仏は死んだ人ではない。仏は仏として生きています。

それは例えば、ご葬儀のときなどに、弔辞の結びの言葉としてよく聞くことですが、地域などで功勞のあつた方に対して、「この上は仏界、仏さんの世界にあつて、ご家族をはじめこの地域の将来をいつまでも見守り、ご加護くださらんことをこいねがい弔辞といたします」というふうなまとめ方で言われる。そんな場面に出くわすことがよくあります。それは生前の徳をたたえるところにも、仏さんをお願い申し上げている

ど、亡くなると向うの世界でまた教化活動をする。このところ、居を他生に移すというので、つまり遷化と言つております。そして禅僧は遷化する前に、自分の生涯を振り返つての感想、あるいは人生の旅を通して会得した今の心境、あるいは辞世の



本堂内の額

御本堂



わけで、ということはお仏さんが生きていればこのことだと思ふんです。

### 道元禅師は今日も 禅僧を指導しておられる

仏が生きていますということについて、もう一つお話をしてみたい。禅宗のお坊さん、禅僧が亡くなることを遷化と申します。お坊さんは、生前は檀信徒や有縁の大勢の人々に対して布教、教化するわけですから

語として——そういうもろもろのことをひつくるめたわが境涯を、多くは漢詩の形の文章で、後の人に示すように生前準備をしておきます。これを遺偈といいますが、永平寺のご開山、道元禅師さまの遺偈は（和尚さんはみんなご存じのことですが……）

五十四年 五十四年  
照第一天 第一天を照らす  
打箇浮跳 箇の浮跳を打して  
触破大千 大千を触破す  
唎 唎  
渾身無覚 渾身覚むる無く  
活陥黄泉 活きながら黄泉に陥つ

こう示されております。この最後のところで、「活きながら黄泉に陥つ」と喝破していらつしやる。死んであの世へ行くのではない。生きたまま黄泉の国へ行き、あの世でいつものように只管打坐の正法を拈提しているよと、こう言われているのだと思います。生きながら黄泉に陥つという道元禅師の人生の総くりの様子を伺うとき、これこそが生死即涅槃、生死一如の消息をあらためてかみしめるところがある。

そういうわけで、道元禅師は生きて黄泉の国へ行かれ、黄泉の国で祖師としてこん

にちなお禅僧の修行を指導しておられる。瑩山禅師と共に曹洞宗門の両祖として、全国檀信徒は言うまでもなく禅の教えに志す幾多の方々に、時代を超えて仏の教え、禅の教えを敷演して下さっておられます。このように受け止めてみますと、仏は生きておられる。どこのご家庭のご先祖さまもみんな生きておられる。この生きておられる仏さんの命の祭、これこそがみ魂まつりで、お盆だと思っています。

## お盆の風習を守りながら 行持をする

お盆にはさまざまな風習がありますね。盂蘭盆会に仏さまがわが家にご来賓として、お客さんとしておいでくださる。この来賓仏をお迎える大事な客間、それが盆棚、いわゆる精霊棚です。この客間には新しい蓆を敷いて、四隅に竹を立てて縄を巡らせ、縄のところに檜の葉や杉の葉などをつるしたりと、そここの家によつてまちまちの飾り方をやっておられます。要は、ご来賓の仏さまが過ごしやす

ておりますが、そんな中で三日の夕方の門火を迎え火、十六日早朝の門火を送り火というわけです。

お盆の風習を守りながらお盆の行持をする。それは仏さまを主人公に据えた、私たちの御霊祭ということでもあると思っっています。盂蘭盆会行持を行持として丁寧に行つていくこと、それが一番大切なので、盂蘭盆会という宗教行持、仏教文化、地域風習、それらをひっきりめて受け継ぎ、行持としてやっていくところに供養の本源が現成する。行持を僧侶共に相承することで、行持現成、行持道環、行持報恩、こういうことに連なつてくると思ふんです。

年々歳々行持を僧侶共に相承して、今回峨山禅師六百五十回の遠忌がありました。このテーマにかかげた相承ということ、お分かりと思いますが、一応繰り返し返して見つけてみると、行持現成ということは行持を表現成就すること。「このゆえに、諸仏諸祖の行持によりてわれらが行持現成し、われらが大道通達するなり」と道元禅師さまはお示しです。盂蘭盆会の行持を行持とし

いように気配りをする。

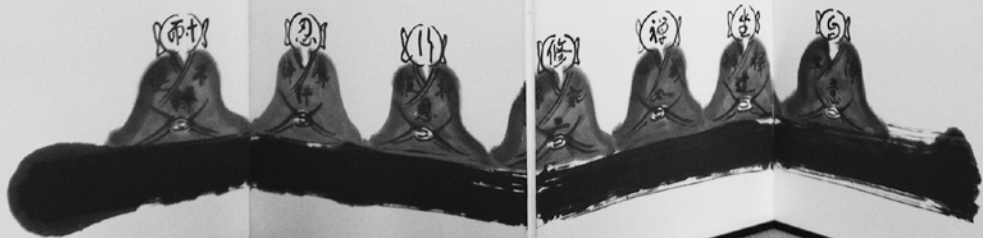
盆飾り、これも皆さんそれぞれのご家庭でやっておられますが、ほおずきをちようちんに見立てて飾ってみたり、あるいは胡瓜の馬や茄子の牛をつくつて供える。あるいはそうめんやら、うどんやらを下げて、昔からの風習で盆飾りとしている。そういう盆の雰囲気を感じ立てるお飾りということだと思ひます。

また、お盆の仕来りの基本というのがあります。これは単なる仕来りというより、むしろ行持ととらえたほうがいいと思ひますが、十三日、いわゆる盆迎えの日の夕方の迎え火。それから十四日の朝夕の門火、十五日も同様、朝夕の門火。そして十六日朝の送り火。俗に門火をたくとい

## 修行の土基

どんなに苦しい修行があつても  
どんなに辛い修行があつても  
どんなにいやな修行があつても  
どんなに理不尽な修行があつても  
どんなにばからしい修行があつても  
どんなにはずかしい修行があつても  
どんなにこらえて我慢する  
とにかく思ふ一事で我慢する  
この我慢という事が修行の土基だ  
その上で  
何かを吸収しようという心があれば  
身につけようという心があれば  
向上心があれば  
おのずから修行がすすんでゆく  
おのずから心についてゆく  
石の上にも三年というではないか  
我慢しよう  
こらえよう  
これが修行の土基だ  
まずは土台づくりをしよう  
我慢を積み行を積みむす  
自然に徳が積みまれてくる  
くのままことを積みむす徳が具あり  
佛りを積むば徳が具ある

春亭 山岸老



山岸老師の「修行の土基」

て重く受け止め、継承して行なつていくことが大切というふうに思っています。

## お盆の行持が そのまま供養の現成となる

それから、行持道環という大事な言葉があります。行持というのは初めの発心より続けてやっていくとだんだん分かつてきて、そして極められ、究極のところ、無上のところに到達していく。それからさらに修行していくと、これは無始無終に連続するよう、いささかの間隙もなく連続するよう。そのところを道元禅師さまは「仏祖の大道、かならず無上の行持あり。道環

して断絶せず、発心・修行・菩提・涅槃、しばらくの間隙あらず、行持道環なり」と。そういう行持を禅師は重く受け止めていらつしやうた。

それに続いて行持報恩、これはやるべきことをやるべきようにやっていく日々の行持が、そのまま仏祖への報恩となる。日常の起居、動作がごとごとく仏法にかなえば、それがそのまま仏祖への報恩となるということです。これを『修証義』では「其報謝は余外の法は中るべからず、唯当に日日の行持、その報謝の正道なるべし」と、こうお示しになっておられます。盆行持を毎年やっていく、それはお坊さんもお檀家の人もやっていかねばならぬ御霊祭の行持、そういうことだと思います。

御霊祭の行持をすることが、そのままお盆供養の現成だという、この要のところを押さえる、これが大切なことだと私は思っております。そして、仏さんの御霊祭であり、今現在生きているわれわれの行持としての盆祭であると同時に、未来に向かつての盆祭、未来を見据えた御霊祭ということが考えられるのではないか。私たちもいつの日か仏さんになれば、このようにして次世代の人たちからお祭をしてもらえると、そういう盆祭でもあるわけです。

れた仏、そして現在この世で活躍している仏、ゆくゆくは仏になる未来仏の仏という、この過去、現在、未来の三世の諸仏すべてをひっくるめた、もろもろの諸仏諸菩薩を礼仏供養申し上げます。それが礼仏という供養の行持でありましょうか。私はそんなふうに、時々自分ながらの勝手な解釈をしております。

本堂欄間「親子風神雷神」



ちょっと話は違いますが、「南無三世諸仏」といってお参りする法要がございます。大般若の法要やお授戒の法要などに礼仏というのがありますが、あの南無三世諸仏といつて仏さまの徳をたたえ、一生懸命拜む。あれはご承知のように、今は過去世となら

### 須川宿の盆の 夕暮れにご来臨あれ

未来に向かつての祈りということでは、つまりご祈祷の法要にも関連してくることですが、お札を請ける、あるいはお守りを請ける、そんなことは日常よくありますね。上級学校へ入るための合格祈願、い結婚相手が見つかるようにと心願成就、また安産でありますようにと安産守り、そんなふうにお札やお守りを請けて、誓願を立て、未来に向かつて精進する。そういう未来信仰の行持といえる。

考えてみると、われわれ過去、現在、未来三世にわたっての行持というのはいろいろなところで日々やっていることです。お盆の行持についても同じで、お盆というのは三世にわたる御霊祭である、まとめとしてそういうことが言えると思う。お盆とはそういう供養現成の御霊祭というふうに私は考えております。

最後に一つ、紹介しておきたいことがあります。私が住職としてお世話になっております泰寧寺は、昔越後七大名が参勤交代で通ったいわゆる旧三国街道の須川宿の奥まった所にあります。この須川宿は上から



懺悔文  
 我昔所造諸惡業  
 皆由無始貪瞋癡  
 從身口意之所生  
 一切我今皆懺悔

# 毎日書道

高橋秀榮

懺悔文  
 我昔所造諸惡業  
 皆由無始貪瞋癡  
 從身口意之所生  
 一切我今皆懺悔  
 仏教企画発行  
 「檀信徒経典」より

たかはし・しゅうえい  
 昭和十七年北海道生まれ、  
 駒澤大学仏教学部卒業、  
 同大学院博士課程修了、  
 元神奈川県立金沢文庫長。

## 作品集

ご家族のみなさまの応募をお待ちしております

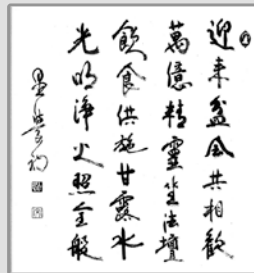
お手本を参考にして、作品を半紙（横向、お名前は左側）に書いてご応募ください。（無料）  
 ご応募の中から優秀な作品を選び、年に1度誌上で発表し、記念品を贈呈します。  
 住所、氏名、電話番号を明記して作品をどしどしお寄せください。

送り先 〒252-0113 神奈川県相模原市緑区谷ヶ原2-9-5-5  
 仏教企画 電話042-703-8641

締切 平成28年9月末

山岸弘文老師の色紙を5名の方にプレゼントいたします。仏教企画（下欄の送り先）まで、お名前・ご住所・電話番号・プレゼント名を明記のうえハガキでご応募ください。

平成28年9月末必着



曹洞禅グラフ135号(冬・正月号)プレゼント  
 丸山劫外師の色紙は次の方が当選されました。

神奈川県/石田政硯様 宮城県/菊池正実様  
 群馬県/佐藤美智子様 静岡県/望月美佐子様  
 新潟県/山田功様

身近な人との心温まるふれあいや本誌への感想、仏教についての質問などを600字以内でお寄せください。Eメールでも受け付けております。

## お便り募集

送り先.....  
 〒252-0113  
 神奈川県相模原市緑区谷ヶ原2-9-5-5  
 仏教企画編集部  
 Eメールアドレス.....  
 fujiki@water.ocn.ne.jp

読者からのお便り 菊池正実様

丸山劫外先生の文章を何回も読み返し、座標軸の定まらない自分の人生を思い返しながらか、人として力をつくせばよいのだと教えていただきました。



お手洗いの「鳥柘沙摩明王」

下までほぼ一直線の宿場町です。たくみの里といわれて、現在、観光地として方々からお客さんが来てくださっておりませんが、泰寧寺もたくみの里の一角にあるわけです。この須川宿のお盆の門火が大変に見事なんです。とくに十四日、十五日の夕方は夜

七時半からだつたと思えますが、宿中一斉に門火をたきます。夕暮れの宿場に隅から隅まで燃える門火、これはまさに仏の命の炎が燃え上がる光景といましようか、先祖の御霊火祭と申しましようか、須川宿の盆の門火は人々の感動を呼び起こします。ここに生きる人々の心、情、愛、安らぎ、静けさ、慈しみ、そういうふうなものが交じり合ってゆらゆら燃える、そんな御霊の火祭と思えてなりません。霊光の町、須川です。ご縁がありましたら、ぜひたくみの里須川宿の盆の夕暮れに、わが家のご先祖と共に語るひとときにご来臨あれと、皆みなさまをお誘いしたいと思っております。

# 現代宗門人の書

吉岡博道

現在の宗門人で代表的な書を二本、紹介  
します。

一本は檜崎通元老師です。四国の瑞應寺  
僧堂（新居浜市）の堂長さんです。宗門の数  
ある修行道場（僧堂）の一つ、瑞應寺は常時、  
雲水が二十名前後、安居しています。瑞應  
寺は歴代住職よく書を嗜み、高田道見、松  
浦百英、檜崎一光老師と風雅筆痕に親し  
む家風が続いています。

書は「破沙盆」です。全紙に書かれた大  
字です。三文字が跳躍していて、秘めた力  
に敬服するばかりです。気力充実の書です。

十年前に書かれたものです。破沙盆、破れ  
た盆は使い道がありません。値段もつけら  
れません。そこから意味をかえて値のつけ

ようのない、絶対のもの、それは悟り、解  
脱とも言いますが、最高至上の道です。こ  
のような禅語は他にもあります。「破草鞋」

「破木杓」「欠瓦」です。

もう一つは大乗寺（金沢市）の東隆眞老  
師です。大乗寺も宗門の僧堂です。これも  
常に雲水が詰めています。古来より「規矩  
大乘」とよばれ、現在は金沢市民の開かれ  
た道場として、現代に対応した教化を行っ



檜崎通元 書

ています。「語尽山雲海月情」と屏風に  
書かれています。碧巖録第五十三則に出  
てきます。ただ、原典は「語尽山雲海月情」  
です。東老師は「語尽」と書かれました。  
久しぶりに会った親友同志が、腹をわって、  
お互いの心情を吐露し合う。読者諸君もこ  
ういう体験があると思います。名利を離れ  
た洒脱な境地、一言ですべてを話し尽くす  
ことです。

東老師の書は龍が水を呼び、虎が山に棲  
むような勢い、縦横無尽、自由潤達なもの  
を感じます。

今回は現代宗門のお二方を紹介しました。  
（前者は正泉寺蔵、後者は松江洞光寺蔵）



東隆眞 書

よしおか・はくどう

1942年9月27日、静岡県生まれ、  
駒澤大学仏教学部卒、永平寺僧堂  
研究科修了。現在静岡県藤枝市文  
化財保護審議会会長、禅文化・洞  
上墨蹟研究会会長、正泉寺東堂。



# 仏遺教経解説

丸山劫外

仏遺教経(仏垂般涅槃略説教誡経)

姚秦三蔵法師 鳩摩羅什訳

## 原文訓読

汝等比丘、我が滅後に於て、當に波羅提木叉を尊重し珍敬すべし、闇に明に遇い、貧人の宝を得るが如し、當に知るべし、此れは即ち是れ汝が大師なり。若し我れ世に住するとも、此れに異なること無けん。

## 訳

汝ら弟子たちよ、私が入滅した後は、波羅提木叉(戒律)を、尊いものとして大切にし、この上ないものとして敬いなさい。暗闇で光明に出会い、また貧しいものが宝を得るようなものである。ぜひとも知るべきである、波羅提木叉(戒律)こそ、汝らの大師である。もし、私が生きていたとしても、同じことを説くだけである。

## 原文訓読

淨戒を持たん者は、販賣貿易し、田宅を安置し、人民・奴婢・畜生を畜養することを得ざれ。一切の種植及び諸の財宝、皆當に遠離すること。火坑を避くるが如くすべし。草木を斬伐し、土を墾し、地を掘り、湯薬を合和し、吉凶を占相し、星宿を仰觀し、盈虚を推歩し、曆数算計す

## 原文訓読

釈迦牟尼仏は、初めに法輪を転じて、阿若憍陳如を度し、最後の説法に須跋陀羅を度したもう、應に度すべき所の者は皆すでに度し訖つて、沙羅双樹の間に於いて、將に涅槃に入りたまわんとす、是の時中夜寂然として声無し、諸の弟子の為に略して法要を説きたもう。

## 訳

釈迦牟尼仏は、初転法輪において、阿若憍陳如を悟りに導き、最後の説法では須跋陀羅を悟りに導きました。悟りに導くものたちを全て導き終えて、沙羅双樹の間に横たわり、まさにご入滅なさろうとしています。時は真夜中で、誰も話しをかわすこともなく静まりかえっていました。(そこで、お釈迦様は)多くの弟子たちのために、最後に教えの大事なところのあらましをお説きくださったのです。

ることを得ざれ。皆応ぜざる所なり。

## 訳

(私の説いた)淨い戒を守る者は、物を売ったり、貿易(物々交換)をしたり、田畑や家を所有したり、使用人や奴隸を使ったり、家畜を養ったりしてはならない。種を蒔いたり植林したり、あらゆる財宝からは遠く離れるようにすること、火が燃える穴を避けるのと同じようにしなさい。草木を切り倒したり、土を耕したり、地面を掘り返したり、薬を調合したり、吉凶を占ったり、星占いや太陽や月の満ち欠けで占ったり、曆についての占いもしてはならない。これらはみな出家者には相応しくない事である。

## 原文訓読

身を節し時に食して、清淨に自活せよ。世事に参預し、使命を通知し、呪術し仙薬し、好みを貴人に結び、親厚媿慢することを得ざれ。皆作に應ぜず、當に自ら端心正念にして度を求むべし。瑕疵を包蔵し、異を顕し衆を惑わすことを得ざれ、四供養に於て量を知り足ることを知つて、趣かに供事を得て畜積すべからず、此れ則ち略して持戒の相を説く。

## 訳

身を慎み、午前中に食事を取り、清らかに生きなさい。世の中のことに関わったり、上からの使いの役目などをしたり、おまじないをしたり、よく効く薬だと言ったり、高官や貴族と知り合いになって交際したり、馴れ馴れしいことを自慢してはならない。みな行うべきことではない。修行者は心をまっすぐ

## 解説を始めるにあたってー

保ち悟りを求める念をしつかりと持ちなさい。過ちを隠したり、奇跡を顕して人々を惑わすことをしてはならない。四供養(四事供に同じ、飲食・衣服・臥具・医薬)において量を知り足ることを知り、少しだけ頂戴し、余分に蓄えてはならない。これらが戒を保つということなのである。

『仏遺教経』は、正式には『仏垂般涅槃略説教誡経』と言います。漢訳は鳩摩羅什(三四四〜四一三)によると言われています。曹洞宗においては、お通夜の折に多くお唱えされるお経ですが、曹洞宗のご葬儀では、生前に御授戒を受けないでお亡くなりになった方には、ご葬儀の折に戒を授けて、仏弟子として、お見送りをします。ですから、お釈迦様がご入滅なさる前に、仏弟子としての心構えと修行についてお説きくださった教えを、お通夜に説き聞かせるわけです。

しかし、私自身、いつもお通夜でこのお経をとなえるたびに、生きている間にこそ、このお経の教えをお聞かせしたかったという思いを起こしています。そこで、経典を



涅槃堂





写真協力/保善寺

お聞きくださる参列の皆様にも少しでもご理解頂きたいものと思い、聞いていてあまりに難しい言葉は、分かり易い言葉に直して、おとなえしています。(翻訳者の鳩摩羅什様お許しを)

この解説をお読みくださいます皆さまとともに、これから、お釈迦様の最後のお説法を、ともに学びたいと願っております。

## 釈尊最後の旅

お釈迦様は、二十九歳で出家なさり(十九歳説もありますが)、三十五歳でお悟りを開かれて、初めてのお説法(初転法輪といいます)で、一緒に出家の旅に出た五人の修行者のお一人、阿若憍陳如(アンニャ・コンダンニャ)を先ず悟りに導かれました。その後他の四人の修行者も、みなお釈迦様に導かれて、お悟りを開きました。ここで初めて僧伽(修行者の集まり)が成立したのです。

鉢を以て、乞食(こつじき)をして皆さんから頂戴する食事を頂いていたのです。(中国に仏教が入ってからは、仏教寺院は町から離れた立地が多かったので、田畑を耕すようになっていきます。)

托鉢によって得たものだけを頂くということ、考えただけでも、大変なことだとわかりませぬ。自分の口にはまずいものも入っているかもしれないませぬ。我儘を一切言えない食事です。どのような食事でも有り難くいただくことを身を以て学び、我儘や、傲慢な気持ちは自ずと払拭

そうして、八十歳になられたお釈迦様は、クシナガラという片田舎の沙羅双樹のもとで病気の身を横たえ、いよいよご入滅なさろうとしています。最後に須跋陀羅(スバッド)をお悟りに導かれました。これでいよいよ全ての者を導かれたのですが、最後の力を振り絞って、弟子たちのために、修行者として守るべき浄戒をお説きくださったのです。

これらの浄戒こそ、修行していくうえで、まことよき道しるべになること、もし、お釈迦様がこれ以上生きていたとしても、この教えに優る教えは無いのだ、とお説きくださったているのです。いわば、お釈迦様の御遺言ともいえる教えなのです。

苦しいお体をおして、お釈迦様がこの教えをお説きくださる情景を思い浮かべながら、大事な教えを、それぞれの胸の内にいただいています。ましよう。

## 出家者への教え

物を売ったり、物々交換をしたり、田を耕したり、家を所有してはならない等々の教えが最初に説かれますが、これはあくまでも出家者に対しての教えであることを念頭においてください。

お釈迦様の時代、出家者は一切の生産活動は許されていませんでしたので、ご存知のようにされることでしょう。

出家者でない方々にとっても、どのような食事を頂くかということは、とても大事なことです。今、グルメということ、多くの方々が、御馳走を頂いています。あまり御馳走ばかりいただいていますと、奢り高ぶる気持ちもともに育ってしまうおそれがあると私は思います。また実は健康のためにも、いつも栄養満点のお料理ばかり頂くことは、あまり感心したことはありません。御馳走はたまにいただくのが程がよいでしょう。

お釈迦様時代の僧侶たちがいかに厳しい状況の中で、お釈迦様の教えを守り、修行なさっていたか、そのような時代を超えて、今にお釈迦様の教えが伝わっていることを、つくづく有難いことだと思えます。今から二千四、五百年前インドに現れたお釈迦様と私たちの間の架け橋は、僧侶の方々と、今に伝わる経典のお蔭なのです。お通夜の折に、お棺の中で、聞くよりもこれから、ご一緒に学べることを有難いと思えます。宜しくお願いたします。



まるやま・こうがい

昭和21年群馬県生。早稲田大学卒業。駒澤大学大学院博士課程満期退学。昭和57年得度(浅田大泉老師)。同年立職(浅田泰徳老師)。平成元年嗣法(余語翠巖老師)。現在所沢市吉祥院住職。曹洞宗総合研究センター特別研究員。

涅槃図(全昌院)



# 禅の空間、 佇まい、 しつらえ

ただ

柘野俊明



ここ数年のことでしょうか、禅にとっても注目が集まっています。人びとは禅のどんなところに惹かれるのでしょうか。わたしは禅の独特な空間が人を魅了している、と思っています。それをひとことではいえず、「凜とした空気」ということになるでしょう。

禅寺のなかに立つと自然に背筋が伸び、心がキリッと引き締まるのは、そこが凜とした空気に満ちているからです。その源はきわめてシンプルなところにあります。掃除が行き届き、空間全体が隅々まで掃き清められ、箒目がついている。ですから、凜とした空気が生まれるのです。禅に次の言葉があります。

「一掃除、二信心」

仏の道を志す者にとって信心はもつとも大切なものです。しかし、その信心より掃除が上位に置かれる。それが禅の風光です。日々の怠りない、心を込めた丹念な掃除。禅の空間の基盤はそこにある、と思います。

大きな禅寺になると、手を合わせる本堂に行くまでに、山門があります。これは三解脱



門とも呼ばれます。門は結界なのです。結界を越えることによって、空間が聖なるものになり、心が変わり、心がしだいに清められていく。心についた塵や埃が拭い去られ、「露」、すなわちまつさらになつていく、といつてもいいですね。そのまつさらな心で合掌し、仏様と向き合う。それが本来の意味でのお参りです。禅寺の造り、佇まいには決まりがあります。南北軸の上に乗るように建物を配置するというのがそれ。南北一直線に山門、仏殿、法堂、方丈が、手前から奥に向かって配置され、東側に庫院、西側に僧堂があつて、山門の左右に浴司、東司それらが回廊で結ばれているのが、禅寺の本格的な佇まいです。これを七堂伽藍と言います。

ちなみに、



仏殿はお釈迦様がお奉りされておられる建物、法堂は住職が法を説く建物、また、さまざまな儀式を執りおこなう建物。庫院は厨房、僧堂は修行僧が生活し、坐禅をする場

所です。浴司はお風呂、東司はお手洗いです。もつとも、こうした決まりに則つて建てられているのは大規模な古刹にかぎられ、現在ではほとんどの禅寺が仏殿、法堂、がひとつの建物にまとめられ、それを本堂としています。

禅がもつとも重んじるのが「簡素の美」です。それは禅寺の内外のしつらえにも色濃く反映されています。鮮やかな彩色をほどこすといった装飾はほとんどなく、木地、つまり、木そのもののもつている美しさを最大限に活かすところに、簡素の美を求めていくのです。

ただし、禅でも臨済宗は時の中央政府とのかわりが密でしたから、將軍や大名をお迎えるために、建具の緑や欄間の一部に漆をかけるなど、寺のしつらえにも最小限の装飾はもちいています。簡素の美に徹したのは、



泰寧寺山門



建功寺鐘楼堂 提供：柁野俊明

道元禅師のご意向で中央とは距離を置いていた曹洞宗であったといっているでしょう。

簡素の美とは、たとえば、障子を通してやわらかくなった光が畳に落とす淡い陰が醸し出す「幽玄」の世界といった、いわば、自然の光と影が織りなす巧まざる素朴な美しさのことです。

しつらえでもうひとつ重要なのが、これは禅寺だけではなく、伝統的な日本の家屋についてもいえることです。外部空間をできるかぎり建物内部に取り込んでくるということ。道元禅師にこんな歌があります。

「峰の色 溪のひびきも 皆ながら わ

れば、建物内に居ながらにして自然をそのまま感じることが

できるわけ。鎌倉、室町期に建立された禅寺にはこのしつらえが当然のように見られました。

ところが、時代を経るなかである種の「合理精神」が持ち込まれたのか、広縁にも座敷としての機能をもたせるために、広縁の外側に建具を具えるようになったのです。そのことよって建物と自然の間に境界ができてしまいました。

時代的な背景、立地的な難しさなど、ハードルはいくつもあると思いますが、禅の心をかたちにしたこのしつらえ、できればなんとか現代の禅寺にも取り戻したい意匠のひとつ



詩仙堂(京都市) 柁野俊明撮影

たいと考えています。

が釈迦牟尼仏の「声とすがた」と山々の峰の色や谷川の響きは自然を象徴しています。それらの自然はそのまま釈迦様のお声であり、お姿である、と道元禅師はおっしゃっているのです。一瞬もとどまることなく、常に移ろいでいる自然がもたらす四季折々の美しさは、仏様が現成した(現れた)ものであり、仏性そのものでもあるのです。ですから、建物のなかにも、できるだ

けそれが感じとれる、自然と一体になれることが尊いのです。そのための工夫が広縁(浜縁)です。屋根はかかっている、庭と建物を隔てる建具がない。そこに佇めば、あるいは、坐

だと思っています。

さて、今回は禅の空間について、そして、禅寺の基本的な佇まい、しつらえについてお話ししました。次回からはもう少し細部に踏み込んで、話を進めていき



#### ますの・しゅんみょう

1953年、神奈川県生まれ。建功寺(横浜市鶴見区)住職。多摩美術大学環境デザイン学科教授。住職でありながら庭園デザイナーとしても高い評価を得ている。祇園寺紫雲台庭園『龍門庭』など国内外多数の庭園作品を手がける。『心に美しい庭をつくりなさい。』など著作多数。

すべての生きものを供養する	正木晃	2
お盆とは三世にわたるみ魂まつり	山岸弘文	4
毎日書道	高橋秀榮	13
現代宗門人の書	吉岡博道	14
仏遺教経解説	丸山劫外	16
禅の空間、佇まい、しつらえ	枅野俊明	20

表紙イラスト 平川恒太

平川恒太(ひらかわ・こうた) | 1987年高知県生まれ、2011年多摩美術大学卒業、2013年東京藝術大学大学院を修了。ゴールデンコンペティション 2012にてグランプリのゴールデン賞(2012)、FACE2013 損保ジャパン美術賞にて審査員特別賞(2013)などを受賞する。

# 『修証義』解説 丸山劫外

## 道元禅師に学ぶ人間の道

発行所: 仏教企画  
発売元: 佼成出版社

「願生此娑婆国土し来れり」——私たち人間は、願ってこの娑婆国土に生まれ来た一人一人です。まして御仏の教えに出会えたことを感謝しつつ、歩んで行く道を『修証義』から学んでみましょう。 本文より

定価1,400円(税別)



お申込

書店もしくは、  
下記宛にハガキ・電話・FAX・メールにて

仏教企画

〒252-0113 相模原市緑区谷ヶ原2-9-5  
電話: 042-703-8641 FAX: 042-783-0989  
Eメール: fujiki@water.ocn.ne.jp